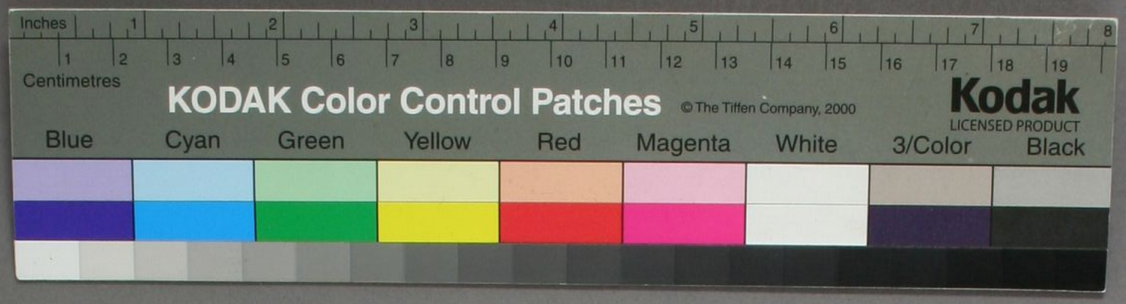

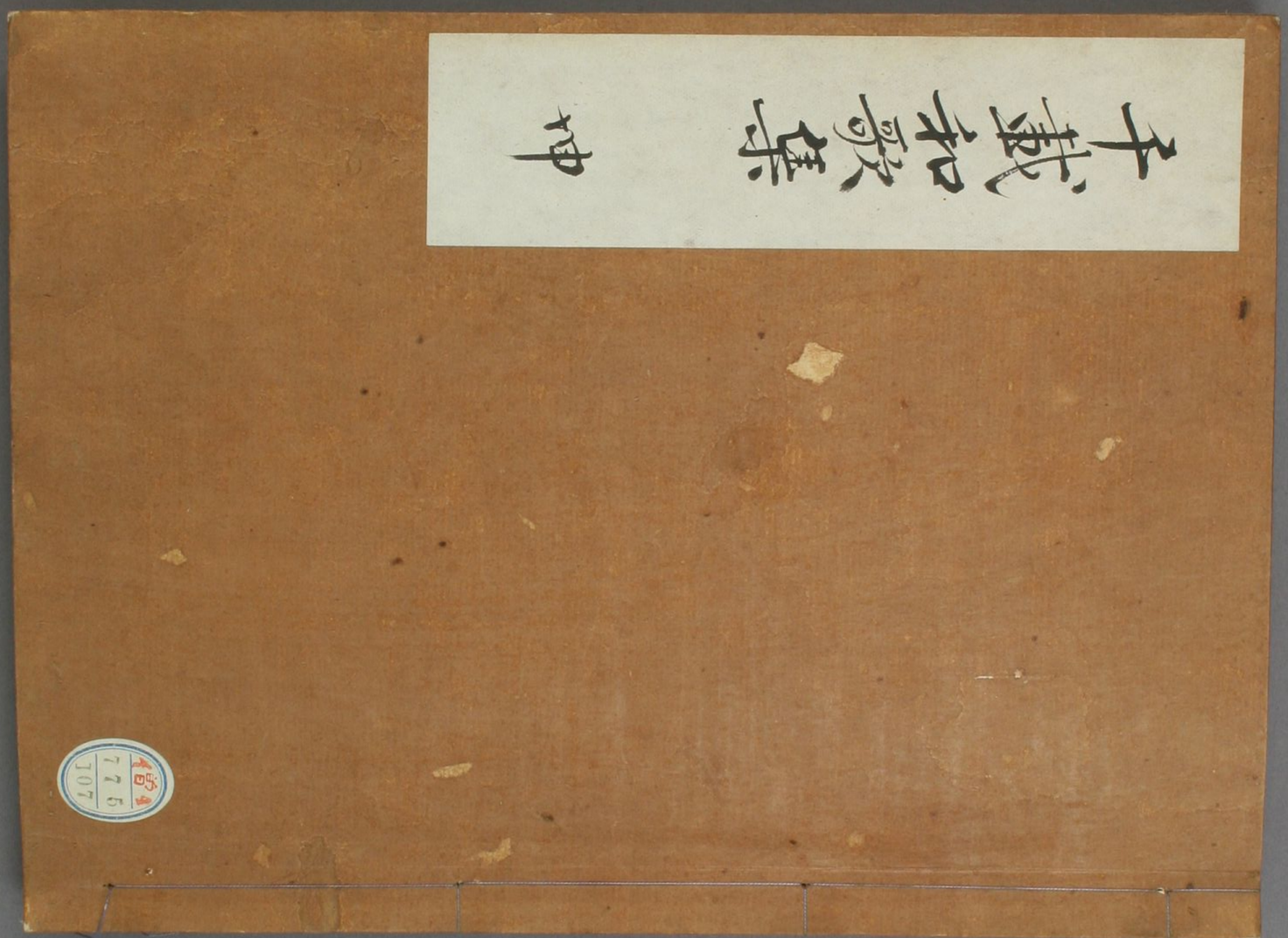

千載和歌集　中

KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

曾 4
775
107

千載和歌集巻第十一

憑所一

堀川院の御時百首の所にてよつりける時
初恋の心を読る　源俊頼朝臣

難波江の藻を埋るゝ玉かしも何しられたる人と思ふや
二条太皇太后宮肥後

ほとゝぬ人とうしめて悪ばかりふ心を見る人とよ
前秋宮河内

まりなしや思ふ心の色なるはこれをそれにも見せまし物と
桂甲納言信忠中将に侍ける時所合し侍ける初恋の
心とよめる　好二条関白家筑前

なまふかりいはしうぬるゝ袂かなをみるゝを悪ばかりける

女まつかれしける　藤原ありきよう

藻くれ火乃後戸とかかいさりみ行かかりしよ思ひそめてさ

影しら須　浦仁親王

いかにとむおりひと人まうめかりしを出しこれをふ御と

一めこし人を雑ともこしうせのうしの宮なる恋ともなりかか

法大寺の右の御門いまう北右

法めとも洞に袖のあらはれく恋かと人まこしら終めるうれ

中院右大臣

法めにもあらぬおりひに成ぬれたこ守かたりの世間にしき北

大納言なりみち

百首乃前をりける時意乃あらそよめる

大歓御門右大臣

御門なる時意を御人まきらかれく世乃つ御門や君おりふらん

白京大夫歌曲

おりへともいそて此山に手を捉く朽やこそかむ谷の埋木

高砂のおのへ乃松に吹風の声にのみやハ変わらるへ夫

待賢門院堀川

あら砂乃岩にくらくて海浪かれやつれかなに人にかくなむ

上西門院兵衛

岩戸引山下の御をとを捉ひくそうそうの御をとをしらかん

桜中納言とし家の家の所会に恋の所とそよめる

菅原基俊

みこそりにいそく御る屋の西東志のふこそふこそしらせてしかる

人まつかりしける　菅原長能

なとふかしと思ひたまへし松のしたに世を捨らむそハ神さまよ
うらやましの人にかくしまれたるこての人の物いふと
きこしめしてかくれなきにいふ人の事をねたみなきよ
つかうまつりける
前大納言公任
松か川かゝる岸なる水の人しれぬやわらてたえぬ深き思ひを
雨のふる日志のひたる人につかはしける
堀川右大臣
人志れぬ物おもひにぬるゝ袖みれハ雨も涙もまされさりけり
権中納言俊忠しのひつゝ家にて人しれぬ恋といふ
心を読侍ける
源俊頼朝臣
恋しくもしられてともに物を思ふ我節への雲かかるらん
恋の哥とてよめる
源明賢朝臣

歎きあまりしらせそめつることのはも思ふはかりハいはれさりけり
百首の哥読侍ける時恋の哥とてよみ侍る
右大臣
人志れぬ木の葉の下の埋水ありふとをかはかくさそや
題しらす
久我内大臣
恋しともいはぬにぬるゝ袂かなさきに涙とはしらせけり
従三位頼政
おもふ人言はいはそで思ふのなる衣の中にみえけるかな
寂然法師
みちのくの思ひはしのふたえもせり思ひハつゝむ色にハ出しとおもひける
藤原清輔朝臣
わすれ行人の心を見しゆへにいかにもはれ上ハつれなき務なりけり

方合し侍ける時思ふる恋のおろかをとゝ見る

刑部卿頼輔

恋しかハ世乃をうれなきいひなし（恋くイ）を誤てを人まゝしきし（せイ）

敬昭法師

人しれ恋洞乃川のあとやいそて乃山の岩井下なり

新しら寸

読人しらず

伊かにをむみかなき京につむせり御祭ゆゑなけ志る人のかさ

憲乃百首の奇読侍ける時寄霧憲といふる心を

よゝ見る

賀茂重保

つれとかれ人乃心やあふ坂の関所つゝつる霧なるらむ

恋の所とて読る

藤原清輔朝臣

後川うな祭の鳥とかりぬれ人にハえをうみかれさりそれ

二京院の此時う風のをれことも百首の奇た事ア

つりける時とある

源乃みちらし朝臣

我恋ハおもふ吹こ安 嵐風乃をとゝにハ為てし為に生志むこと

横川の姉もとなる山寺にことりねける時いとよろ

志さまうそ侍ける侍ける

仁昭法師

世にいとふそしとおもひし遁世なりやなく人をこひ渡るかな

新しら次

花園左大臣

為をりけるハあ乃ぬ津り無ことつてん人をとゝるあはとも俺ぬこ

大文前右政大臣

みをなく只一そうに者我思ふ遁世ゆゑ乃ふ我やかなきなる

前中納言仲房

新しら歌

津守國光

日を經つゝ志けさは海さる思ひ兼あふと雖の如となるらん

大中臣清文

あつまたに新しき志るしもぬむ新は悪の如かり光の志何くかりけり

源季貞

人志れ其思ひそめてし云ふりいまは洞乃色となりけれ

祐威法師

色みまぬ色の袖と志るしを海はなりしをそむ家洞かりきも

大中臣定雅

氣味は志れふ乃奥の如ますきに家にしるも志海人のかさ

祝部宿禰成仲

君こゝる洞時間と浮ぬれは志れふ乃山も色なまかり

二条院前皇后文芳院

いかにせむ志ふ乃山の下の紅葉時間なくまゝに色のまさりを

賀茂重延

いはしと袖の時間の如そくをうかかりひ冬のうしめかく稱と

採政右大臣の時乃百首の哥の如き紀恋の心を

讀侍ける

源三位頼政

あさ洞しやおさ姫る袖の下くる洞の末と人やこ川らん

皇嘉門院別當

思ひ稱の袂は色ゝ出にけり志く海にも小ぬわり洞かな

とんかり乃かゝ名高つゝし根みく絡りけれを清り

川ける

右兵衛督隆房

おかしくはかさ○て志浮れぬ色衣さてもなすへ家紀念かしと

ゆ風し

よるん人あつう須

なりれくもちきやきゆとぬれ衣今をおすとも為にいなりさし

恋は所とて演繹する　大納言家家

人目をハつゝむと思ふまを紀ねく袖に所まるハ浪なりけり

右京大夫季能

法皇なさふいたてそこなむと思ふまをあひみぬさ紀の別なりけれ

法眼実快

とは人にこそれぬるを君にしりしぬるやとおりふ袖は常を

藤原伊綱

法皇なくて笠にもみ拾るけと衣恨こむとてハうへしやいせし

桜政右大臣の付家の所合に感の所と家よめる

前京季能朝臣

思ひ知るをは慰もありなほしあひみて後はつゝさはりへハ

おなし家に百首所演繹する附袖恋は心を演繹する

皇太后宮大夫俊成

こりしきなを山かきをは下霧や入さり袖ハかくしなりらん

志乃ふるをひ

いるまをむ宝は屈しまに着もる

恋はしりを言ふまりへん

天保六乙未年閏七月十一日写之

中村直道

千載和歌集巻第十二

戀所二

堀川院乃御時百そ所をすりける時戀の心を

よみ侍ける　大納言公実

おりひめまり人にとらるや所毎廢川むらいぬ所に袖ぬるやと

題しらす　祝園左大臣

たるなくも人に心をしたくしかなりしかりひ初しら

二条右皇太后宮大貳

戀そめし人にかくつれなきれ我涙しも色かわるらん

白川院三条殿にたてしまいける時おのことも戀の所

讀侍ける　前中納言雅兼

かりけるに人もしるるかりしたりし袖よ朽えて称とく

桂中納言俊忠家に戀乃十首所讀侍ける時いかれ

ともあれ侍る戀にいへる心を

源俊頼朝臣

うかりかなる人と初瀬の山おろしにけしかれは行らぬ物と

たりし十首乃中に地らふ戀といへる心をよめる

修理大夫敦季

うれしくは塔乃心を神もきけ門ぬめかなれしとも思ふ

柳かりの宮実戀　藤原敦仲朝臣

結ひをく柳しらすさしの葉枕ともてやとぬるこひなるかな

きそこゝ海らぬ戀　桂中納言俊忠

こひくてかひもなきにおきけ浪らせてはやうて立へれとや

如に侍りしける　法大寺法大臣

恋しなむ命を誰にゆつりおきてつれなき人のはてをみせまし

俊恵法師

ちれはすむ網乃川のさゝやきせハおなしり柳はなしかくれそなれ

従三位頼政

我恋ハ千尋の海のいかりなれやましきさハ宮浦のちし寺

前照房

わかれ路恋しなむ別乃かなしさよ命にかへてあふこともかな

道因法師

御祓する小かさりおりせハ神雨にぬれてまし袖と

賀茂重保

百首哥奉りける時恋乃哥とてよめる

前参議教長

いつとなく恋路ハさまさき物なれハ手をたゆけともあせなかりけん

おなし物思ふかなしきる人よかなる川ハ思ひなき人の
つまれハよめる

二条院讃岐

わすれ路つゝかつまほしさに梅さハなきをのまつかねの
大網を志みちか将よ待つ時夜なことく御けると
おもひしハ誠うしなきらめといひつゝらしてこそれし
跡くやしけれ

法性寺入道前太政大臣家哥合

あひ見むと思ひかけつゝ白浪の立ちも帰らぬ汀とを

後三条内大臣家に哥合し侍ける時恋の哥とてよめる

道因法師

恋しなむ身ハ惜しからすあふことにかへむと思ふ命なりけり

贈左大臣長実八条の家にて恋の心をよめる

読侍ける

行うへる山に人の乃なるれしやあひみぬさ紀に忘しうるん

寄郷恋といへる山と読る

摂政前右大臣

左衛門督家通

あふこと紙さりこそとのゝ思ふ物にしたきの名を頼つゝ

志のひとくれにまうしのかるへにまとし侍ける人に侍

とし侍る

二条院御製

かとやかくさも書かる紀大宮そ秋侍ことハありこ志らしや

百首の前の中に恋のんを

式子内親王

神乃色ハ人のこふまてかりもせに掬り紀思ひを祈しあまハ

契當秋恋といへるんを読侍ける

左衛門将良經

姫ハ打し契ハまゝ侍とにくく小山にかゝるくれの宮うる

恋の前とてよめる

藤原成家朝臣

恋とのゝ前面なく宮の浮雲ハくとりもあへ兵袖ぬらしけり

忠侍書恋といへる山とよめる

藤原家実

砕うくれうきハやれともこしなまたらく侍候にうけハれやとも

影しられ

藤原家隆

嘗にも契く雖う物ならひありひきてゝる物なのゝ宮

読人しらす

契をくきことの葉に勇をうへて好の世に逢しあひきしかる

大同にして月あかりける秋人くあそひけるを

おのかふみてなかくかなしといひく給ひし人の
延年に伝へたりしける

殷富門院大輔

我袖へかくかれはらむ雲のうへ月のかけひかりかはしと

恋の路世坊といふ百首を詠か

藤原家基

おもやらて恋路に南にふる坂やせをせてぬ人もかなしらん

江州に実恋といへる心をよめる

西行法師

手枕の上にさへ胡蝶のしるしさへ宗玄と人はしらしか

題しらす

源三位頼政

我袖のしほのみちひ浦なくは涸れいらぬはかりもあまし

法印静賢

しほたるゝ袖のひるまハなけりやとも我そ浦のあまにハなや

俊恵法師

おもひきや夢ともいはん世の契をさきむすびけりと歌へしとハ

藤原隆信朝臣

我袖へ人の涙とともにとらはれにみちおもいかはるへき袖のよりかね

賀茂政平

おもふとも我らくかたられぬ夜のつまとなりて人の心や岩木なるらむ

源光行

恋しなむ涙のきしや淀川なきなかれにかへらん人にすむ

寄石恋といふ心を　二条院讃岐

わか袖ハ塩干にみえぬ沖の石の人こそしらねかはくまもなき

新しらす

かくりける歌ハ何のむくひそと志る人あらしとこそ聞し物を

民部卿成範

太宰大貳重家

恋しかむしと思ひたるかなる後川あふせ河りとはきらぬ物ゆへ

能部卿範兼

いそ河よりかりくる川の瀬にもしらぬあふせ成とも清人とも思

石清水乃所合とて人々頼侍る所寄松恋と

いへる心を頼侍る

桂中納言理房

たゞれしかむ清くしに手をへてくい川にもしらぬあふの松恋

恋の所とてよめる

庫蓮法師

ありひ子の愛るふみ君そ物ぬれもあるそと馬の音をつゝみ

俊恵法師

夜とはなり物思ふ法ハ物やらぬ国のひまさへつれなかりけり

法にしたかりく神を朝霧に迎るなりとく思ひまし

菅原是忠

恋れ人ハさもなりぬ人そうらめしなる家をもかくいまし物を

茂原親盛

おとひきく心の中はしらみも見ぬ人ゆへ川うれ

静縁法師

とのつゝ法にしたるかなるやと待らんかなとかなる

むすましくハかくて志られまする人に津りしける

大江維順うむ出め

志しかく憂名ハさそも立まけり心の中ハ思ひまけ也

晩風催恋といへる心をもめる

藤原彩家朝臣

世とともにつきなれ人を慈愛なれ病なれまれ秋の夕風

鄭しらす

源師光

疾しさをいくはさへきねさへとも為ハ教なるにかなしかなし

如何にかつりしける

桂大納言実国

疾しかハ我様へとゝに思ひ出さるゝハつゝき心なるとこも

たまつ藤家通

ひさすゝに根こしりせし先世にあふまてこそハ契らさりけめ

おりひかりしるゝハ出さりける我女乃りしまて境と

かりてそおくらにうゑつ宋尼しかきか

藤恵二衡朝臣

海人殘心も病の物なりしさりともいまハ衾とやるんん

法住寺殿乃後之の前合に臨御遠紛恋といへる

んをよめる

桂中納言通親

いましはし宮教めにも慰めて思ひをしぬるとひろむ家

藤原盛方朝臣

松川乃あるかゝ須より契しうかしは言を引ゐりふらん

皇太后宮大夫俊成

おりひさや志代乃ちしかさらなつめて百歳も相かし

まろ[illegible]をんとハ

岡月十二日

中村直道

千載和歌集巻第十三

恋哥三

題しらず　藤原実方朝臣

契こしことの為りふそたのもしき浅くさもかくやうるとおりへハ

しらしりおりひとしぬ仏よそかく忘られ其我なかくこも　桐模

つれとなく成ぬる人の玉れと夢思ふ事の歌見ことせし　藤原長能

屈ちらかふぬる事もなくて別ぬるとの手枕いつり忘れん

姉む月乃七日の歌大納言朝光物いひ侍ける人の日

仏あなさ為りし人のいひ侍れハ浅りとし家る

小大君

七夕はかしつゝ思ひしあふとハ我ちなる君の立まける式

ひとゝ乃く望太后宮まいりて侍りしるに弁の御

のとの為の御乃こしの御いまなるを以まへなる硯と

引とせくとあらしまかなつ家侍ける

宇治前太政大臣

うらめしやむしきなれ為りしひとのことをぬや何の仏なるらむ

也し　弁乃めの御と

しるひとハ人乃忘るふとくなれ侍りしるとかしるらん

堀川院乃御時百首の御歌ありける時恋忘仏とも見る

大納言公実

仕ぬる我をしりぬ池の水に浅りとしの思ふ事を

中納言師時

恋をのこ志川乃とさまれくるしれハあいて年毎る思ひなりけり

源俊頼朝臣

あまてなれ行つまれとめ行うやむしの志れしのひてもたくすよ武

中院乃右大臣中将に給ける時所合し給ける事を

ある

修理大夫敬季

世とこそ小川方も名紀仏かな恋ハ臣なる物かうれける

旅の恋の心を読み

僧都覚雅

旅衣なるこれ色の志るなれハ家ゆるえよりかたるさりなれ

堀川院乃御時叡書乃所をとう（の御時ことりよさせ

さ歩ハ御宮く所とむ女房乃りとに御かそしきると大納

言公実ハ康賀の王乃母まつりたる紙入をもう

の内侍にも御かりしたるとさしてそ手見えたる所を送

まて給ひれ御かりし計る

大納言公実

みなしなれ末紫を行く物なれ蕙乃君をとて思ふ事なりしつるて

中将に給ける時所合し給ける恋の所とてとれる

権中納言俊忠

祝恋ハあまれ行うるに祝しつくかたく時なれ浪の下草

法性寺入道内大臣に給ける時乃所合に弱きうし

なふ恋といへる心をとらめる

菅原時昌

なれ紙さりに三輪の板といとし（並て弱ぬる時ハあいぬ君武

法性寺殿まて五月乃御供祝の時とのことも所読給

なるに契将憑恋といへる心をよミ給ける

新しらす

右大臣

引かせて洞と人よつてむさしたらしや行かひ夜半ハ衣ハ

百首奇をなさる時悪の方にてとる也

前参議親隆

志ゆゑ行雲とあまの袖にも浮きなるひかりとうけ

奇会し給る時とある

茨原清備朝臣

志らしらぬる袂も志ゆりしか波まいまハ濡せてうゑる

那須法師

らしけらハ洞に打ねうら衣ゆゑ人めを思ふかきりせ

新しらに

三河法師

ありひ絶さても衣ハある物ゆゑなまあまぬハ洞なりきり

茨原仲実朝臣編中守まさりけり家る時くしさ

くさりきりけるとおりひらすくなりて浮月をみく

讃岐なる

拙女戸く

数なるね男にも心のありかなまひとりと月を詠めつるかな

契日中恋といつる心紙讃岐

中原清定

波まや打そなまし加ら衣袖のひるまく思めさり世ハ

鳥羽院御時くら人所に給ける時をんなかりかり事

らしめる

茨原成親

拙そのるをさしう御しとおりふまもちくなかりけるとも数なる

穿燿る朱恋といつる心をとらしめる

茨原仲經

なきわたるとこよの露のしられぬともなくさへゆるす袖ぞある
　擣衣といふことを読侍る　　読人しらず
秋ぞかし涙のきぬたうちしや　衣のおやぞみえむ
　月前恋といへる心をよめる
涙とも知らぬ袖にあやなく月のやどりぬるかな
　寄他人恋といへる心をよみ侍る
　　　　　　　　同太后
忘らるるいまは秋とやかはりけむまし思ひたえてきえぬべきは
　　　　　　　　左近中将良経
志ら露といひしそれなれやかたみにつけし袖ぞいま
ものを思ひ行かくとはかなきことの袖は
つゆけしなる
　　　　　　　　左兵衛督隆房
いたくらに吹く風の露しせん袖志らずのくもの
　読人しらず
おもひねの夢に見えけるやすくさへ袖かはくまぞなき
　　　　　　　　従三位頼政
なげくやしきものは志ぐれども思ひ出つる月のまへ
　　　　　　　　源師光
いとふ身とてやさへ秋とも忘るれ
　　　　　　　　藤原隆親
あはれなくいまぞ心と思ふつひの身も人のあはれ
　　　　　　　　源光行
紅に志をれし袖も朽ちてぬおもひや人にもえぬる
　　　　　　　　皇太后宮大夫
　　　　　　　　皇嘉門院尾張

命ぜられ物ぐらうかりきれあまたそ人をとらしとも見る
契ことに侍せるを志ゝる如よつかりしける
右を中将忠良
何とうや志ゝふかはあらしてたゝの朝ゝに蔵る菊の名そうき
菊中契恋といへる心をとらせる
右皇太后宮小侍従
見しに菊のさめぬやそ乃うつまてはふとのめし言をまゝらや
人をつかりしける
二条院御製
志ゝらめやあつる洞乃霧ゝ別の床に従て恋しかとハ
山邊半
読人志しらず
御ゝ志しらね霧をく袖をかりひかれかことはりの床乃後に
右大臣に侍ける時百首歌をさせ侍ける時桜朝の歌
とてよゝ侍ける
桜政弟右大臣
御りはるかこりの空を流れて慰めかゝなる河り明乃月
皇太后宮大夫俊成
見るれは世ゝ時契をきるゝしや御しゝ時ことの
土明時宮

后七月十首

直衛

千載和歌集巻第十四

憑所曰

新しらす　和泉式部

いかにしてちらすれ心を慰めむひるはなかめにさそもくらしに
是もみかはらか昔の聖そとおもふ物ゆゑ何さ聞しきに
むかしにらんしきる人のをなかとよりあるなり
らしきかせ給ふくつかしける

和山院御製

なそまそは中くさそもありけしとうそ拘りふ所なるを自ら
ひさしく聞うてこさりきる人乃とゝつれたりきるを
あまつかりし宗る

小式部

思ひ出て誰をかなる人乃ゆゑまし憂よきへ聞る歌なりしハ
古宰師敦道のみこ中あく侍るに御つかはしも
ひさしくこゝろして侍るに讀侍きる

和泉式部

まれにそもかなりしかはあらしまし思もかけぬ秋乃夕ぐれ

新しらし

かゝふれを命ハ忘れて聞ゆゑ聖しまと相思のひかる
とんなかりしより聞ゆゑ聞りてつかりしける

藤原実方朝臣

竹乃ゑに雪ぬく霜ゑ何しらしまゝ夜とこめてなきにあるか

堀川院乃御時百首の奇なりける時恋の心をもある

安原基俊

未ぬ下ちりひれかる袖をとれ小みくいくはへ不備にひめ

藤原仲実朝臣

まゆしすゐ川とゐ方にこへかゝてうつゆの流しのあとはかり

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時家

にて寄記恋といへる心をよめる

源雅光

吹風にちる人の桜の花よりもことにかなしきは涙なりけり

逢不逢恋といへる心をよみ侍ける

大納言成通

あひみむといひしはかりは末も知らぬものゆゑまたそなかるる

権中納言俊忠中将に侍りける時家に歌合し侍りけるに

恋の前にてよめる

伊予三位 前参議親隆家母

恋しさは斗らかけくまてかねのたくさいそかさ

権中納言家に十首の恋の歌よみ侍りけるに忍恋の心を

いかなれはよひよひ毎に思ふらん

あらかこひて人とも知らぬ恨みしをさとなかれあひのせん

権中納言師時

うらみてもかひなき身こそあはれなれ何としもなき袖のなみたは

ゆふくれのかきはみとりしさのと詠侍る

花園左大臣

久我内大臣

別くはきのふはかりを恋しとはおもひかねたる袖のせく

崇徳院に百首歌奉りける時恋の歌とてよめる

上西門院兵衛

我袖の涙やにほの海ならんかりにも人とみるめなけれは

前参議親隆

あさはなかやの粉の出来しだいもあへさらしのかりけん

皇太后宮大夫俊成

長からぬこゝろの海にも月はなしひとにみだれてやへかゝる

待賢門院安藝

意とのとすかにはたれたまかせてやまひ長くかくしかれ

藤原清輔朝臣

あふことはいつまでかはの月とつくしゆふくしかも世なり

百首の歌読ける時恋の歌とてよめる

俊恵法師

人はいさしらずやいまもおもふらむみをもや春のわかれもかなと

女のかよふへあまりきこはまよつもりける

午実全

あさ海しやきはいつかふさかの木の宮うちはかなかりけん

新しくす

人のうへとおもふにいそぐ海しつゝ絶えずする心と

契もりてとうへのまゐらせんかまつりける

参議雅通

契りしをまた誰にかは頼しらぬ忘れは我と忘れましかと

思ひて猶いはぬかな世はなかしかりけれ

かれはかきしかれ

従二位家隆

春ののとかにはおもひは何鶴の夜のむかしかなしくよ

うき身のとのこともちはさとにいふもとつなまつり

かりまよてまゐせなかりける

院御製

藤原季通朝臣

従二位頼政

二条院御製

寄衣恋

源仲綱

山さん秋ゆも行く夫成よりて意ハそかゝるのとうハ
穿浦意と云侍山紙演る
二条院内侍恵河
侍かりてさ夜と稱宮内ハ浦風よりたのめぬ浪の音ハとそ云る
意ハとそ云ゆる
讃岐
一夜とて夜かれし床ハ行しつゝやりても夢の後ゆるゝ
百首所とませ侍ける時遇不逢恋ハ山紙よりも侍る
拾政前右大臣
たりしへくかゝる山をとゝるとりハあふ事をかへてくましかも
左所不言意といへる山を演侍る
前中納言雅頼
あふことはあるし所しかたらすハ山とゝ山にもやうまし物紙

稱香増意といへる山紙演侍る
拾中納言経房
うつり香ハ何しとまもむさ夜衣忘れぬつゝとく成ける物を
曙くれの雲をとゝもに諏めをるとんかまゝあふまも
乃るみよんと申ける好つるとし計る
右を中納忠良
忘れぬや思ふやいまゝ行ゝぬ所ハ躰しときし明周乃雲
所合し侍ける所意ハ所とそ云ゆる
後恵法師
おとひうの山を恋ハまそ物ぬる相ハ来もとをとゝ行わり
殷富門院大輔
見せしやかれしまゝあふ所神とにもぬれ所もぬれし色ハかゝる夫

隋川意と云る心を演る

法三位新政

山志郷乃ちつのくさとにいもとさきて我度とこに私とうらん

弘久恋といへる心を演繹する

菅原隆信朝臣

人忘れ侍ひそめてし若菜の袖の滅もるや忘ぬらん

希會不絶恋

菅原彩家朝臣

いつなれはなりれはなくぬ中川まあふせの数乃そくかゆるらん

折政右大臣乃時百首の所とさせ給ける時遇不逢恋

とてある

源仲綱

きるんなれしきのく中川淋をしてなりれなるハ洞なりけり

初跡好思恋といへる心とうたる

二条院讃岐

今ふみよ恋といふ色あはれ侍これも心乃かはるとおりんハ

恋乃分とてとある

右皇太后宮小侍従

恋そあし心ハ色乃かはれはおりひらへしまかつらんらん

道同法師

任波濤やいはしの浦のあまくにうつぬ袖ハぬるく掬りハ

遇不逢恋と云る心を演る

俊恵法師

おりひきやうかりしとまれ侍るの音と絶ひとにて何すへとハ

交歓恋といへる心を演る

唐歌うへしてハ祝し夏乃歌ハ菊にもありて人まれけり

恋乃分とて演繹する

法印静賢

千載和歌集巻第十五

恵行人

新しら河

桐模

うたねよそりなく見しまとふ世に人ハ見てやくしなん

和泉式部

神をかけて神ハ杉ともうせぬかり相思ことそつきせさりける

ともかくもいはくをへくる成ぬへし君に時てこそ人をへりけれ

三輪乃月みしさひくなきていはし人の名称を諏めし物を

紫式部

志りくはなさ世乃つ[illegible]と思ふにも身をあはかくなきて俺ぬる

左大将朝光かちうことねこをうきてかたらはなこせと

とせめをへりきれをつかはしける

馬門侍

千とせ物ゆるかしを社乃神もきけ君志れをハ祝もいはれし

かたらひける人の久しく音信さりけれをつかはし

守る

大貳三位

うたうひし命かりハあるあらし理なし中なるぬつきに

のとしりて侍ぎる相とこのこと人に物中と空をふまを

つかはしありきれをいひ侍りけるを

桐模

ありし人をこうめとやさむ第歌をあやし記号を流の祝を

山乃ふるに山まもいらぬ何しきとしいひく侍りけれを

つかはしける

大納言あるの物

山とりも物ゆるに面を見るハ祝の人ハいるへき

上西門院兵衛

うかりきる世くれ契とおりふしもつくきハ今ハ所のこうハ

前参議親隆

たるなれはいるに桜のおとふらむちりのこつたる家ハ今しきと

新しらす

右大臣

たるなくもこん世とうつて契かな二あひ相なし為もあしと

右左中将忠良

相りひ出よ夕ゆきもたなひかハられや歎くあしぬ繼ぬ

左兵衛督隆房

変しかはうかれん出よ志ちたる小祝思ふ人のつゝにしまれ

右皇太后宮小侍従

君こふしうれぬる世のさ祝思ふいかなるつゝにしすぬん

二条院讃岐

君こふる仏ハ屋ことをもひつくハ此世ハかりと相をあしうハ

殷富門院大輔

かたりけしきとみてこいきる為ハ家をあてこ思ひける我

信恵法師

君やあらぬ祝為やあらぬおもつ分相しとおもふかりぬる

家信法師

相ぬりへ口かくらぬ人をいつる相をあたれなりきる為ハ契かな

月前恋といつる仏をとらめる

かきくらせ月やハ相を思ふするかこちうかなるまう泪かね

寂超法師

ひさかさ月相へ今やハ恋そめし誰ハまつ川ぬるく袖ハ

意所とてよめる

祐威法師

つらしとも恨るまでなりける憂をいとふハ表社かれ

藤原隆親

思ひ志る心なかきを歎くなりうき身なりしかへりつらせれ

源有房

おりふとも思ひ入れさもなりしかれ憂と思ひぬ心ともなる

惟宗康吉

そうなくて浮の世までと契ひるまでさ浮ゐにもかゝるんと

源仲頼

いとゝるゝ世のおりにくいかれ意ハ我身とゝなれさるんと

海海法意といへる心をよめる

鴨長明

おりひおまりうちぬるとひのさかりしも浪のとなりて引かひけり

あらて之しく成ゝるおとこ思ひ出くいまちりハ

あらゝなる心あらしかくいひきれ浮かりしかある

太郎門前無院中ね

ふれとうき身ハ今ハかゝらしとつらさもおなしつゝなきらん

百首所見しきる所意の所とてさきせ給ふる

崇徳院御製

歎くすに読の歎をおとろへぬ契りしてのかゝるのこうハ

鹿京方夫郡猫

年ふれと家ハたゝぬ海ハ意しき人のかゝらましかハ

藤原雪通朝臣

そいたゝおさ侮る神も朽ぬそ心のまゝ小おつるなきこそ

皇太后宮大夫俊成

打く山鳥鳴きぬ夕ぬ行きぬかと嫌り紀意術に何都もん

我志れ小蔵ぬよみ君ぬ洞にも悪ハ打きぬ掛にてゐる

藤原清輔朝臣

おさ抵ふよみるめをうつくおまるに恨ハ為ぬ掛とそきけ

上西門院兵衛

何をんにそうそ乃めとて恨ひむ思ひをとゐる筈もなりり

意の所にてよめる

殷富門院大輔

和紙さりの宮角のめとて絶しきれるしかりしそ七ハ意しき

新しら歌

掛政前右大臣

打しみる手あにいひ志しぬ別かか月もしそれ五明の宮

右を大将実房

悪俗る石ハ宮ようきぬれと洞君座に身ハ志川むし弟

陽関所悪といへるのを演ふ

前中納言雅頼

思ひ寄こ抵る関所に悪を掛ふ八聖所為に身をそうへつる

九月つとこりに如まつりしある

桂中納言通親

世に志しぬ絶乃別にうちそへて人面りかゝる掛そかゝし紀

意の所にてよめる

藤原理家朝臣

契つりし所に流るとれ演千馬路に沈んをぬ恨をそある

藤原定家

志るなりし契りし中もかちりもる心世に人を角のこもるかか

絶夜意といへる石紙にある

那昭法師

秋乃夜と掬ありふと云ふさりとハ杜禰宮の杜小そし當

十首の奇人乃らませ給ける時なめる

前參議教長

ちしゆるハ君にゆいつくしてむまたき人もとそあれ

嘗意故人にいつる心を

仁和寺法入道法親王覺性

なれ人と思ひ出るゆふくれを恨らしことそくやしかりける

新しらす

源俊頼朝臣

これとみたむの田の中にさしてさしてさしてしきれし志川乃あさ衣うハ

さらむるあまの田の澤よりの民も為のかゝり袖もぬるらめ

馬内侍

さらぬ小春澤夜のさむけさに杜ハ禰なむ物とやハ思ふ

和泉式部

うらむへなゆとかゝる物とかきよりしても

とゝぬ君かな

五未年閏七月十六日

中村直道

千載和歌集巻第十六

雜哥上

上東門院ゟり六十賀をとこなひ給ひしる時 演

俗ゟる

清成寺入道弟左政大臣

四ツ人ある人ありけれハ奥山の岩の松ゟや遠をつまくし

上東門院入内の時の御屏風に松ある家に笛ゆゑ

あそひしある人ある所に演俗ゟる

大納言師信

笛竹の御ふるゝ聲を聞ゆる聲の雲風吹やそ伝ふむ

一条院の御時皇后宮五巌をしられる時長月うし

つき十二人まうハしも清人にてお紙をりをかむ

きせられ給りしるゝ兵衛といふあるひもの云けり

給りしるとこれむしろやと云ゆ紙きして中納実方

朝臣ゟるて清く御前にて

おしひきの山井の御ハ云ゆるをいるゝひものと

ゟるなるらむと云をきゝ事也事うし 演俗ゟる

皇后宮清少納言

うたこ侍りあいふむ寸人分ゆゑ日数ゆるふ斗を

十二月斗に門をたゝさかりてなん御りかしと悔ゝり

ゟる男としかへりてうとハおさぬるんやといひて侍りけれハ

清少しなれ

上東門院出家成親

ありさとの長の御ゟりに鶯の巌にとつる扇をとゝめん

菊原実方朝臣のとの井所にありつとも小御して

あるつよりて朝につゝらししる

藤原定信朝臣

いまだ稀く相まりあさ[illegible]あさ[illegible]ありしまかる
二月さかり月のあかき夜二条院にて人々おまさ
ねありして相撲[illegible]し[illegible]侍[illegible]内侍周防[illegible]
して[illegible]のひやうにいふを[illegible]大納言
忠家[illegible]を[illegible]とてうひ[illegible]と[illegible]
入て[illegible]

周防内侍

春のうち[illegible]手[illegible]
[illegible]

大納言忠家

[illegible]

一条院御時皇后[illegible]清少納言[illegible]
[illegible]
[illegible]

皇后宮定子

[illegible]

清少納言

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

選子内親王

[illegible]
選子内親王[illegible]

也し　中院の右ハ月ハまうち君
何ゝ給れ御りひ給へさあつさう人ひ給へ事時もありなむ
右大将兼長春日のまつりの上卿に立給ゝるにもに
菊原範綱ゝ子清綱ゝ六位に給ゝるに思ひ給ひ持衣を
きせて給ゝるを拾ひしくみくれ又の日のりつかりしに
さしとらせ給ゝる　信原古史歌物
きのふ思ひ出ふとらせり雅なりしむ元ハ給ゝるかさりしられぬ
上東門院に給ゝるとさしに出さりまるもの女房のせう
うこのつねてに筆つゝへに御うてんにて給ゝれも
つりし計ふ　山家武郎
家義さらきゝかりし給ゝ先の音をおもひ給ゝてや人の爲ん
二条院の御時にし法相をうけ給ゝることをうけ給ゝ

いりて入うさのうちに給りなり罪度ハ拾ゝされ
さりきれハ行幸ありきる夜月ありなりに女房の
りとに申給ゝる　従三位頼政
人忘れぬ大内山の山とり名ハ来ふくれ嶺のに月をとるかな
三条女御琮子遁世のうちあふきかとし月出しく
つゝらし給ゝるにてうへく給ゝる
　権中納言実綱
嫁をへく光をとさせと思ひしに思ひぬ月の新にもあるかな
月ゐなといつる心を　仁和寺法入道法親王
いふ人にありひとそへく見る月のくとるハ御るんちとそれ
月の所あまたとさせ給ゝる時演給ゝる
法性寺入道前太政大臣

さゝ浪や国ほみかくしゆるれ初ゝ月ひとりもむ
あまれ京宮の月ハひとりしてやとゝぬ所にいそかりん
影しらす　中務卿具平親王
枯ゆて月ハ何事をうハおもひ所さむ
物思ふぬ人とやこゝろひ詠む続詠ともぬまゝに月をうらふ
源思つゝ昔と月ハ思し物をかくやハ袖のひとかかるへさ
和泉式部
枯のこゝろ所なるかゝ秋かゝぬ人をこゝろひの月をみをもや
かりふしと紛ふる法月のいみしくあらく紛ふるまゝに
紛ふる　久我内大臣

かくしつり墨世所中のかりひてまゝ見せもすめる東宮月ハ
山家月といへる心をまゝ紛ふる
皇太后宮大夫俊成
経俺くゝ為をかくまゝへ山さとまゝ所まりく内ハ見せもの月ハ
百首乃所をまりまゝる時月乃所をとてよめる
前参議親隆
もり内ハ見せ所月ハ宛さして経紛ふさ経ま雷雨まゝり
月所十首続紛ふる時
藤原家基
内ハ千鳥物宗弁所間まゝとめれ忘しアハ破ま月ハふきぬ
俊恵法師
いゝ和歌ハ清瀬川まゝむ月ハさかまゝ所をらぬ氷かりゝり

賀茂成保

藤原清輔朝臣

登蓮法師

源仲正

源仲綱

待賢門院堀川

こしけり

を清院御製

清雲のかゝるゆゑにあるゆゑにかくれなくてそ出明の月
人乃なの山平より日よりつゝとりて出侍るあるつき月
のかもしらく侍られしとゝ也

仁和寺法入道法親王宮性

あのかゝるまゝの月のをとらしそは牡や山の峯を出まし
月の宮とて演侍る

芝性法親王

ことの音を聞ゝ志し掬ゝ雲の也月宮る夜の峯の雲の也

桂中納言長方

あるていたん名所といふ思へとやうこふくまゝまゝある月代
殿富門院まて人々百首所演侍ける時月乃所
とてよめる

藤原定家

いかにせんさらて憂世ハ慰さす於し月も洞前をり

新しらす

藤原家隆

山ゆゑ松乃嵐成為にしめて渡り祢宮ゝ月を見るらん

八条院六条

まつ山をいとゝ山そなくさ海ぬとも桂山の名の乃月

法印実源

世紙いとふ心ハ月を志るへとや山乃とにのゝ思ひ入らむ

藤原隆親

さひしさも月見るゆゑにハ慰ゝぬ入なむ海とら海人りなる

宮夜月といへるんを演侍る

園位法師

霜さ拾る庭の木のもとゝ海ゝ分て月ハ見るやとらふ人もなる

世紙のうれしく存物山よりかりこと侍とて人まつり
りしけるに　平実室
経されし宿をハ出しく物へゆく月紙をしてひく山ありいれ
故郷月とよめる　後恵法師
都の板井の清水みまゐて月さへ出ます成よける我
我三月といへる心を　藤原家基
さしこうハ新しくむへき世のうつ○と詠るに水に宿る月成
賀茂社好当所合に月の所とてよめる　菅原親盛
何となく詠むる神のうしねハ月の樓の霧やとくらむ
山家暁霧といへる心をよめる　大江公京

月紫ふく宿の霧に夢覚て五明すれ月をとゝるかね
山家月をよめる　静蓮法師
足曳の山のしをくしもしてもまさしてやはなる五明の月
月照室菓といへる心をよめる　紀康宗
三河とり小坂をやしきれふ霧拓の蔵の三紫を照す月新
月照山家といへる心を　法昭長真
国土当生海山下我すやとるしハ月さへ菓のいわりとてさす
山家その月といへる心を　藤原為忠朝臣
あり紀都の霧吹結ふ木拓に宮さまでのわる山家その月
慕尾月といへる心を　覚延法師

山風にまやのあしふきあれはかり桂にやとる五年の月新
新しらす　法印慈圓
山陽に雅文かゝ海を海ゆきて桂のこゝろ月とゝるらむ
月新の入ぬる海(あらい)にありふかゝ海をこゝむやとおもひ末の穴
橘政茂右大臣の家に百首の所にせ給ける時月の
所の中によめる　俊惠法師
山世にて六十年はなれぬ雅の月にて山陽に桂かりそれ
月の所にてよめる　園經法師
こん世にハ山の中にあらハさむ河にてやとゝある月のひかり後
二条院の御時四代まで侍つることなれはとひて讀
侍ける　皇太后宮大夫俊成
いりあれは西川にあらハ手とへて代々の雲井の月とらん

堀川院の御時百首の所にありける時述懷の心を
よめる　藤原基俊
唐國にあつらしへもわかりにくきまて河にぬ歌とハせし
僧都光覺維摩会の講師の請を申せる後あひ
くもれはきれハ法性の入道前太政大臣に相申せるを
志めりうちうちに侍ける所にて又の年も申請よられ
侍らしける
契をきしさせもの家と命にてあはれとしの雅にいぬめり
運をいつる百首所讀侍ける中にとある
源俊頼朝臣
世間にあるしにも河にて成ゆ家に洞さへ入りたれ
述懷の心をよめる　覺富法師

すきくけしらせらの長の夜のよは雲まるかれ思ひかたかき

はるかしやうさ月かくしも雲ぬ一ぶきの世とさへも思ひぬらん

理周法師

三王宇に満うてく侍らるよかりて家なん橋の

あとゝ中と申すくよう侍らる

源俊頼朝臣

ゆく末紙思へハかなし津の国のかりの橋も名ハおりけり

世捨の橋のこゝろまて

道命法師

行すもかりゆくなる世中に骨かりの名をし程成

おなし所にて

信周法師

たゞこれハかりの橋ハ名をかしひしけりさと望むるとも

津守國基月満りて海経者も十四分成にけれと

皆基にてしてありしさ満まくなりて侍家国に人の

おもひもかけりて見て侍れ松のもとに成けつりて

かきつけ侍らる

津守家基

人こゝろあらはなれとも経者の松の家しきハかたらさりけり

吉野の滝とよめる

中納言經忠

白かしに満ひやせまし吉野山おちくる滝の音なりせは

さらの大覚寺に戸かりてこれかれ所にて侍らる

前大納言公経

演侍らる

瀧の音ハ雨にてひさしく成られ名ゝりなれ程さしてなき

屏風に滝前ある所紙よめる

藤原長能

ぬ家ハちる嶋ゝ○ハみたる足成の山より前る滝の音しらむ

京極前右政大臣布川の瀧見侍る時よみ侍る

六条右大臣

あれ色のこゝろ白雲と見ん程ゆゑ雖さらしきむ布川の瀧

竜門寺に海にて仙宮に書付侍る

能因法師

あしら川にのりてかゝへる扇なれは瀧にふ人は見えぬなりけり

かなし龍門のおく術とよめる

仙人貴の背の瀧ときそこれはむなしき床とそこふ谷風

布川の瀧とよめる

藤原良清

春のこゝきしはいとの粒なりて名をりもたるなり布川の瀧

むろの前戸とよめる

茨原敬方

毎に清を川宮の中にしきの粒なりいまつきぬ思ひなるかも

堀川院の御時百首の所をりける時橋の所とて

読侍る

大納言師頼

うつきやまたしもたてぬ物の人にくめ思ひしけ生ぬり

おもしろ御時の人のおのこゝろも歌をさらりて所川にふ

ゆつりけるに約束をとりて読侍る

桂中納言俊忠

いそおもひかたこそかなれいせの海の塩瀬にかゝるあまの約束

百首の所の中に松を読る

修理大夫敬雪

玉藻なりいこゝろ御家の宮根松夷世までにかゝる手の程ぬらん

夏菓紙よめる

源俊頼朝臣

頃みくハ郎侍りさきなる折りたに浪こす風の場なぬ日もなかず
唐田社の所合にて人々詠侍ける時海上眺望とて
いつもちとよりん侍ける
　　檜大納言実家
ひふこ花ハ秋のうち山の縄も見えしなるとの沖まかけ也
　　檜中納言実宗
なり海にて沢ナのみれまに小見浪せハ浪ハ雲ぬ物ハ物にもなる
　　右衛門督頼実
なるくとおまへの沖とも浪せハ雲升ま海にあまたつり舟
　　勝望の山とある　　園玄法師
かにもかく浪行なりたる海せも影ようかに沖ぬつり舟
　　菅原室綱

春野絵し海にさかなとこめつ風浪のかくとも見えぬ今さ成
　　和所海とよし侍ける　　祝部宿禰成仲
折くとし花浪にてもまや海のうらむれたりけれ
　　和所の海にて

閏七月十八日

中村直道

千載和歌集巻第十七

雑歌中

五十首歌めしけるついでに鳥羽殿の桜のさかり
に御幸ありて花を御らんしてよませ給うける

鳥羽院御製

かしこくもわひとさへも桜花法の春とし誰かみるへき

藤花の心を詠侍ける

仁和寺法親王覚性

むらさきの根ともそへし桜なかりせは誰も心あらし

僧都親実身まかりて後又の年の春待賢門院の
花盛なるとみて詠侍る

僧正覚範

宮こにや花をみし人はへともめくらさひしかりけり

えしらむかしく後東山の花見ありき侍けるに
円城寺の花ちりかかりけるをみて詠侍ける

前中納言基長

いにしへのからくさのをり山桜ちかは秋とはいつかみるらむ

遁世の後花の歌とてよめる

皇太后宮大夫俊成

雲のうへは春くれにしを花は散とも思ひいてしと

白山にあひて侍りて後宮のはしめて
法師のはしめて山寺にこもりて侍けるにつかはしける

わかくさのかるらんしくさ世にとまりけるを

東三條院

源師教朝臣

むかし世に宿りしうつりへく物ゆへにまた世をまつりぬ

高倉院春宮の御時坊官に侍りけるを春宮御即位の後人々に賀茂社の歌合とて人々よみ侍りけるに述懐の歌とて詠侍る

権中納言実守

位山花を待つこそ久しけれ春の宮こに年はへしかと

崇徳院の御時十五首歌奉りける時述懐の心をよみ侍りける

右衛門督公行

春日山谷にうもれ木とくちぬかな苔の末葉は枝の折りて裾とも

歌よみ侍りける時詠侍りける

前左衛門督公光

物おもふ心や身にもさきたちて憂世をいてむしるへなるへき

述懐の歌とて読る　俊恵法師

数ならて年経ぬる身はいまさらに世をうしとたに思はさりけり

道因法師

いつとても身のうきことはかはらねと

述懐歌よみ侍りける時前白川院につかうまつりける身となりて思ひあつくられける

前恵家基

いにしへも底にしつみし身なれとも頼もしきハ白川の水

広田社歌合によめる

藤原盛方朝臣

[illegible]

右大將實房中將に侍ける時十首分を兩也侍ける
ま遊懷命にて讀ける　中原師尚
ねなくぬ男とうき雲のこれぬかなれば家の風ふけども
當文科中侍ける時人のとふ
らへなりけるに讀て遣らしめける
大江匡範
おとひやれ松にあまるまりしおもひけるにあるにてさを
節しら寸
菅原公重朝臣
世おうさとおりひ思ふ人をかくて侍るやおもひしさを
菅原兄忠
引人をかくて捨つるあつさ云つきもうひかりまり
一条院内侍奉川

いそ我ひとりこ雨と引とあて昔ようへる君を易ねん
摂政右大臣乃と北家の命を遊懷命にて
らめる
源師光
いまはさ行家にぬ物に男と遊しく生れぬ（さ紀イ）侍ける世にもふるかな
つるさめしまいせまりまると辞申する時大僧正
行尊うりとにつ　にある
源俊重
いりまもむいせ御藏人かくれて思ひぬ破思浪に打なれ
あるかうこの山さとに住侍ける法風にかしかりまる歌
よめる
源俊頼朝臣
吉木の戸をみ山を御しにあるかれて海に付てもぬるに袖に
山田の房にまもふりけるかりまるとしてよめる

橘盛長

とふ山田は庵に猪火のかけしに主猿のやまにかゝりしむ

堀川院の御時百首歌奉りける時山家の心をよめる

二条太皇太后宮肥後

山さとの宿わびしくはたちわかれ人にかけしてかゝるよは

長月のつごもりかたになりて菊のおもしろく咲きけるを人につかはしける

藤原基俊

頼みつるわれのうきをしはつかのやかしやさと人のとへかし

世をすてゝ後月のあかく侍りける夜ならのさとにて

藤原道信朝臣

この世には猶つきやつつむひとつきのあかさ

題しらす

和泉式部

命ありていつまでもいさ世をとまりぬ先づ小磯にかけおかけ

紫式部

数ならで心に身をばまかせねど身にしたがふは心なりけり

世間さだめなく侍りける比よめる

藤原道房朝臣

秋にても逢はば秋と思ひなんあはで世をたのむ人もなし

前大納言公任家の歌合に風をよめる

中納言定頼

なにの根に秋風ふかく嵐と思ひけるやま

也し

常大納言公任

芳風の身にしむこゝにかほりの本は和をとゝせりひやりつれ
お大納言公任入道志得くなりあれて侍りけるとき
僧の懐来法眼かくとくるとて侍りし家る

法成寺入道前太政大臣

住にしへは思ひ家きやうりしかくきむ物し法の衣と

也し

入道大納言公任

おれしとし契しあれは庭さる法の衣とあらとこれりや
おなしとしの衣かなむ侍にある

三条院うくれさせ給ひて法うの院のまへとこ家るは
雲の梢はおなしさ海まくつゝかなしくつれあるは
むらくは蔵りあるとみて其ゝ地に江侍法う侍りけるは

つゝかしまる

弁おめのと

むりしみし雲の梢はそれかしむらくは門とさしてけるかな

一条聡子内親王仁和寺に住侍りまるあ法かなひの
こなりと三のみこのりとくられく侍られし
つゝかしまる

捕仁のみに

山さとのかなひのあはなれるはとも雪もさひしかりけり

也し

聡子内親王

山さとはさひしき宿の梢あもうきひのあはとくるとそまに

大納言実家のとゝに三十六人集とりく也し
つゝかしまるなりは故大秋沙門の右大臣のかさ
て侍にあるさうしまあさてとしつ家られく侍り
にある

大皇太后宮

のわかるへおもかけて海ふ往ふこれなりたく候ふるへかなれて
十月に室服まかりて侍ける又のうしの長傍宮
ともかくいし侍ける時きくて

中納言長方

ことあ人の花さく去をとそこにて相付申ハ椎はなの袖
新しらす

菅原敬方

雪世にもうれしき世にも先ならつ洞ハ相なし後かりけり
左ふ國に侍ける時れなしき海なる袖にもしらかとり
てのわるこゝかへしきる時そのうれにもれにかりときく
て和の人のりとまつかりしける

前右兵衛督惟方

山脈にも志川むとさけハ洞川かれしかりもぬるく袖に

世をそむかんに思ひあらまる法ある

宣人法師

かくすうなる力なれ位も捨てんに思ひなるしかりけり
仏教ならむとまてあらぬ國にまかりまるとむと
なとりて京にのかりて後日吉の風しかまつりて
讃侍ける

平康頼

思ひきやしかくの海浪立ゆりまるあふ力をもかくん袖とハ
述懐の前讃侍ける時

登蓮法師

かくしかり雪世の中を志のひてもまつへおこと所にあるかハ
海川にまかりあるかりまる時とある

覚禅法師

思ひうもあくかれ仏くれ侍ハ河内く菓をに寄そこあるて

世のつゝみかおさしの紙思ひくらしける

桂僧正永縁

夢とのこは世のことの思ひ出るあはれもしへさかとハいつこなれこ
まつゝ侍ひとありく雲林院なる所にまかりたるに
人のこゝろへりきれもつかりしける

良暹法師

は世をとも雲ゐるやしまかそしく物をとてまつ
影しらに　とみ人しらに

うかはしとの海とうむ程ハ身すれくさむ世ハ夢のゝうそ也

嵯峨式部

いはくこも身をやるかたはあるまゝ手ハかしとるつゝもからふるか
述懷百首の所中に夢の所にてよめる

皇太后宮大夫俊成

うかは夢ハなこりまてこうかなりけれこの世の海とかをやなをかん
百首所にてつゝきる所云者のゝとよめる

藤原季通朝臣

うつゝともうはしにいくて定むへは夢ゆとをみそはそあらめ
いとひてもはなるゝわる身をかゝらひ来へはは世ゆゝ様ハ

上野門院兵衛

これや夢いつれかうつゝとうかさを思ひまりてもこゝめへはかな

花園左大臣家小大夫

あすあらぬとむつ此夢の様にしさ何あらし世に生をしあらん

前大僧正覚忠臣曲けたり大夢にまかり入て神
仙といふ所にて金泥法花經書をて理を得とて

海を行(まイ)てさてもやすれ　いりとも稱覚をあらぬ命なりける

六条院宣旨

先年つとなるは程をかなしかれとくれたつへおきの世なるねは
さ海人ひと思ひ立人は物あはれなる名なれは筆の
ことひくときて

二条太皇太后宮式部

いまはとてなれなれしそのとの心なをそくも成海さるかな

新しら守

宮人法師

大井川とかせの瀬に勇とかけくもやくと人にいはせてしかな
病ありて東山なる所に侍りしとき侍りしなりて後
いりさ人はとひく侍りしとしよりある

大江公家

宮人山右馬門ぬとも打ちて苦のしるにはさらへさらまし

新しら守

法眼道覚

かはひくいとひし座のともきぬ(まイ)拓ぬと聞へもあはれなりけり

賀茂社に所合に述懐所とてある

寂蓮法師

世中はうまはいはしうられ思ひしるしはいはしましやは
山寺にこもりぬ侍りしるに海にしる人の
いつりいそんをるといひて侍れは清らしかる

覚綱上人

世紙をむき草の房に墨深の衣の色はうへなるものかは
源清雅九月ありしさ海へて山寺に侍りしを
人のとひて侍りしる名事せしとも侍れはよみて
つかはしける

源通清

うれしさ紙ゝ書くとつむへは苔のあるかたせとくとなれ
還羅たく御家る人のとゝまつかし御をる

藤原季經朝臣

うれしさを三木共神まてつむ所あり御りぬるあまれ衣
今上の御時五節の程侍臣定家あやまりあるさ御
まきこしめすことありて所之れそまて御かる
うれしも言ま家る又れしのやとひの御い
とりの流れあれむきしさ御山面あるしたか弁
定長かとゝまや御をるまそへて御家る

入道皇太后宮大夫俊成

あしあの御雲衛まとひし事書て霞とさへや海をつへ
このうしを奏しや御家れしいとかしこく衣か

ちせなまりくゝ今ハさや還羅經をくゝ書へ
御をしきありて心をうしれし御をつゝ
せと御いとされたれとみて御かしかる

藤原定長朝臣

蓋あつハ霞とかて海るかり海とひし雲衛をふや
この道者御あそれひむりし御代まとかれ
いかむとなの人中御を探

閏七月廿日

直道

千載和歌集巻第十八

雑歌下

短歌

堀川院御時百首歌たてまつりける時述懐の歌によみてたてまつりける

源俊頼朝臣

もかみ河　瀬々の岩かと　わきかへり　思ふ心は
おほかれと　ゆく方もなく　せかれつゝ　底のみくつと
なることは　もにすむ虫の　われからと　思ひしらすは
なけれとも　いはて思ふそ　かひなかる　かくされ沼の
うつもれて　ひく人もなき　かけさえそ　浪のあやなく
あやめくさ　むかしわかれは　見えもせそ　いにしへよりの

うれしさは　昔とはかけは　ふかゝりし　かさなる袖も
くちこそね　何年よりは　おほかれとも　思ふらん人に
あはれなる　おいて後の　うらみても　いふともあれは
何かよの　いつまてとて　うきつらん　みなのさとに
吹く風は　もとしきにた　志のひなる　うち払ふとも
松の緒へは　あつきは松に　雨ひゝき　見てやみるへき
せきつらし　ひとりとやね　きくしらと　こよひ袖の
年もくれね　仰きふよの　そしめらす　雲の上には
かくへとも　和歌の浦は　ひさしかり　月のかつし
ねられ弱し　うきつらむの　さはかりし　ひきもねの
いはせさに　ともにたちの　あくられて　これもかのには
あら浦はさ　うつりそめ　わさしらも　花のあやに

おしろへ事　うれあつめる　あくれは　あされ心を
うくれなく　なりれての色と　とし物乃　うなかしまや
なるんとすらん

旋頭哥

志も津ふさ行るんまアりわりもる紙紅そてのわり
なりもる法みかりとのいしとりの朝臣まつり
らしける

源仲正

あはま地のやへ乃霧とまきさても　君まあるゝハかとへ
たし　くなるんりしそれ

源綱親朝臣

かなまるしまのつさらし　ねゝ見れ風にてある霧も
それくむかへるうわと

百首哥たてまつりもる時　猿のんとさんる

左京大夫敦輔

あつま地乃堅鳴か海乃ゝ　風まるひも切ひし　いもう
うなのゝ面新まる西

折句哥

二条院乃山附こいくしさとい　海の字とうれ上に
並て旅の心を

源雅重朝臣

弱なへていさんに拾ひ　主西川白浪とする岸のあさりと
なを何ゝ乃　の字とうみまとさて　旅の心をとる
知る

仁上法師

何とれく物そうなしな　雄風の月のしむ夜まで旅の様をハ

物名

和歌所
中納言定頼
大貳三位
二条大宮大貳殿
源俊頼朝臣
刑部卿頼輔女
待賢門院堀川
僧都有厳
史蓮法師

九月十三夜よめる

賀茂御さゝめり

言の葉にふきやあさ月新ハ十夜よあまりてこまとなりしり

隣我関他恋といへる心成よめる

新雅法師

極ひさしさすやう屋に於御国にて青し青せぬうたハかなれ

堀川院の御時百首ゆうち恋所とてよめる

前行のあか後ましは世界やありしやかしはかうなるしむ

藤恋

恋しひくる恋のやつこの旅ゆてもあれくせかしやかたらさハ

百首所望りしるに恋の所とてよめる

待賢門院堀川

遠事はかきれの法をるくしさとおへかし人のこりこつまて

六波羅蜜寺の誰の聖師にて高座よりある後に

雑学の女房あしと法に侍宗れハよめる

良善法師

人はいとはしたまてしりぬまり方へ物をおこせしと思ふなるへし

山中にこもりて侍ける時仏ある女を女はしりく

つるりし侍きれしよみくつりしまる

定人法師

おもあしやさそはかきちの丸木橋ふきふかひに落ぬへきかな

賀茂社にこもりて侍きるに此年つ○にまふくさ

て所よりん前欲なりしくあそひけるにてしるなる

つれ○にこもりある人をもしり事それらへもア

かりなとしきるうさ人あくなきしくまふくこ
さりきれはつるらしける

笛行はこちてと行よ思ひそむ憐よ音ハせしまそあきる
あつ下はるよ下かりなるよ八ちしまそよある

心覚法師

八ちしはなるふとと聞かかるいよ行へよ聞かかると思へと
如をとらひ行きるといふもあまりしき事なるを
おもひ為えしといひ行かれはよある

道周法師

行らしとさてハとも秋山為まりしらハ志行くなる世なりとも
行らしの小咒の文字と所はるふをさて十首よるん

安性法師

行かるよれくよ行かある

源俊頼朝臣

かみよとなる文字ハ海とはしかれは所も周所と物さらめや
山本よ海ふくなりきる時見映なるとゆのあよある

赤染衛門

きふと又年は貝さう海さうかれ未のあ西と近付ぬらん

新しら守

宣也上人

極楽ハなるきれはとくきしうとつとめていくる所なりけり

右十七十八之巻於彌勒寺写之于時閏十月二十日今日雨降風烈大木折損
所々破損多

中村直道

千載和歌集巻第十九

釈教歌

維摩経十喩此身ハ水の泡のことしといへる心をよみ侍ける　前大納言公任

こゝにきえかしこにむすふ水のあはのうき世にめくる身にこそありけれ

此身ハ浮雲のことしといへる心を

定なき身ハ浮雲によそへつゝはてハそれにそ成はてぬへき

三身如来を讃せる心をよませ給ける　花山院御製

世間ハみな仏なりをしなへていつれの物とわくそはかなき

法花経薬草喩品の心をよみ侍ける　僧都源信

大空の雨ハわきてもそゝかねとうるふ草木ハおのかしな〱

菩提といふ字を結縁の為しける軸字によませ侍りく
身のおきて文のかしらにすゑて句のはしめにおきける
よめるとしるし侍る　法印綱云

求めてそ蓮の縁とおもふくうさ世に又はうつゝとなりぬれ

法冷泉院御時一品経供養せられ侍ける時
普賢品の心をよめる　藤原国房

月輪のつねにすむなる山の端の雲をかくるかほりましてハ

寄月念仏といへる心をよみ侍ける　堀川入道右大臣

入日ぬるにや又ハ思ふらむ心とうきて西にむかふへき

天王寺にしまいりて舎利をおがみまゐらせ
よこ給ける

瞻西上人

薪つかせ樵をもみくさまきむ是や名所にみるそかなしき
所あけまゐりて給ける精舎の程金泥の法花經
書をりて後所山におさめまゐらせまゐらせ
給ける時思ふんや給ひ物ふかなつ家をこく給
ける

茂原敦家朝臣

愛さめむそ乃曉とまつ程のやうをとてとせ法花をしし大
かくてまゐりて給ひ後所山までおむ男子かりよ
けるそのうち古ふまて此所いたいて給ける事なり世
三十三所其觀音おかしをまして所にまゐり給
ける時に給ひ岩波まて池乃出るとみくまゐらせり

ふかる

前大僧正覺忠

世を思ふ佛の志ましありきれまゐる打も消ぬかりきり
河かとの觀音後見ゆるまてまつりこ
見るまゐれ後そ前る所かに命まゐるすゐらせおもんも

桃源瑞仙とある

僧都覺雅

ふ道まてむきひしかも家ゆりわ身ゆゑと思ひやはせし
池羅尼宗乃受持法花名を稱不可量何況雅護
異人受持をいふ事なりと誦して持經者の法家
あるもしくや給ひしよみ給ける

前大僧正快源

うれしくそ名をあらはしふ事なりぬ此法の花を身と結ひける
河源池乃土光佛乃此名をとみ給ける中ふ智恵光佛

法花經我等長夜所習宣法乃心紙ある

前中納言師仲

かゝる世もむかしき物にしりぬれはやくかゝるにちとそれ

寄景ふ乃心とある

圓經法師

鷲乃山月を入ぬとゝる人ハくらしにまつらふ心ありきり

曉物ニ人雲居寺ハ拓本堂に堀河右大臣すいり

こゝ命ちるん御家るまよある

神祇伯顯仲

いされたゝ池に新しうらひぬれ志つゝやき世にも思ふまゝ月を

大原御乃常啼芽ハ心とある

寂超法師

朽ちつる神にハいくつまし心なしとゝまる正法かゝ沈き

維摩經十喩此月ハ夢のことしといへるにとある

茂原資澄朝臣

ゝる程ハ夢も夢にもしられ程もうつゝもてハうつゝと思ひし

登蓮法師

鷲ゝぬまゝんにうかりきれたるかゝ世とハ夢とみかゝ

高師ニ戸いりてよみ御家る

寂蓮法師

曉と高聲く山にすつ程や苔のしたゝまもまゝ月

煩惱即菩提ハ心紙ある

式子内親王家ハ中將

思ひそ心ちとつゝ成ぬれは沈も水ぞへてそうきり

觀音乃ちかひを思ひてよみ御家る

[illegible]

法花經序にはんとよめる　　前大納言時忠

春ごとに歌しぬと法乃庵にあるあれもはしれ侍もとる

[illegible]　　藤原伊經

[illegible]　　右京大夫季能

[illegible]

法師見渡古郷　　皇太后宮大夫俊成

[illegible]

[illegible]　　式部法師

[illegible]

[illegible]　　法橋泰覺

[illegible]　　藤原教仲

[illegible]　　蓮上法師

[illegible]　　皇太后宮大夫俊成

[illegible]

[illegible]　　中原有安

[illegible]

雪洞等法式と

中恵清室

夠まく表御のり於座まゐる者ハ座のうらとそとゐる

山階寺乃涅槃會の書かくに座入滅の黄と

思ひよせ侍る

恵章法師

をち月乃雲くれもしいれ入おもかれとそふの空れしる哉

涅槃經を如於掌見法身像乃心をよめる

俊秀法師

清くもしかも座敷くらんあくやそうつる色もそうるも

火威久不滅といつる心紙よめる

寂然法師

燈油もしらしたるひ家烏邊山ゆう別れしかるみやもうせ

河原院經乃心をよめる

平康頼

烏乃音も浪の音ふそかくふなるおれ口法ときけハ分りけり

天王寺を御行幸を付而古寺忠昔といへる心紙を

めり

藤原定長朝臣

世をとすく物語ハしりしにしりて縁とそしめしたくをも時をし然ふ

天王寺にまいりて遺身舎利を礼してよめる

天台座主暁雲

法門をかくぬ尋ねし八萬軸の經をしらぬ人ぞなき

往生論式なを侍る時教化の所演侍る

津師永観

みな人と後さまを思ふ心をもて拝ふをたくしるへなりけれ

千載和歌集巻第二十

神祇命

後一条院の御時にしめて春日社に行幸ありきるに
一条院の御時に御例とおもひしかしいたさせすふく
とさせ給ふなる

上東門院

三笠山さして来るまとり彼の神なる紀の掌の御とこのほと
長元八年閏日左大臣命合し給ふるのちに左方の
ゑ人をつらひに経合に詣て命よりと給ふるに左の
以ふくらみ給ふなる

大納言經輔

経ちしの浪も心をとさせ給ひ入へそ行に来りの御さりける
白河法皇熊野へ戸いらせ給ふなる御伴にてしかるや乃
王子の御おもひにて人々命よりん給ふるにみたり

なる

後二条内大臣

思ふまとくみたくかなる神なれは極やに御とあるかりきり
百首命めしきる時神祇命とてとさせ給ふなる

四条流汁製

道乃面のちりに光をやわらせて神も佛乃なれるなりけり

故京清輔朝臣

天のしたのとなれは柳葉を御笠乃山に御しらしめけん
中納言家成経ちしに御うてて命よみ給ふる時
なれる

大納言澄季

神代なりつもりの浦に立ぬしく經ぬるむ手の浪しきりまもす
大納言稱して出給へて給ふる時経合の社の命合
とて人々とみけるに述懐の命とてよりん給ふる

右大臣

かくのまとて八ヶ屯御まきりあれまつ況しことハ所なと思ふ
そのうち神威あるやうに愛想ありて大納言あも
還御しく御家ゐるとなる也

皇太后文太夫俊成

なかし奇合に
徒よかりぬる力とも経長の雲ハさりともあられたるらむ
おかし奇合に社頭月といへるんをとみ御ける

右大臣

掬りまきり松柄いとくとひてほし昔もかくや経乃元の月

俊恵法師

経長の雲乃ゆなあひ御ひさかりも月ゆゑ御れハ雲ハ重なり
唐国社乃奇合とて人々奇とみ御家る時社頭宮と

いつるんに御ける御ける

權大納言実國

としなへて宮御たるゆふかきてなりいつれ柳乃梢なるらむ
有る乃ゆゑ思ひくに年をたる御体に御なるに湯の
明神とハ三輪乃明神とかむ中御と申て御ふうれ
付く御家ある

按察使資賢

めつらしく此年と三輪の神かゝハたるしかるの出湯なる也し
熊野にまうしてゝ御なる時發心門の王子あくとなん
御なる

権中納言經房

うれしくも神乃ちかひとなるへまて心をおこすつまいりぬる
三輪乃社めく霞ととめる

僧都範玄

枝かしてと家こむまとに三輪の山神乃たるしいなれなりなり

日吉の大宮の本地を思ひくらべ侍る
法橋性憲
いつとなくわしの高ねにすむ月の光をやどすしがのからさき
日吉の社に御幸侍りける時雨のふり侍りけるその時に
感くられはまされけるによみ侍る
中原師尚
御幸せし高ねの松に雲はれて空に日吉の光さしける
高野の山に住侍りける後伊勢の国二見の浦の
山寺に侍りけるに大神宮の御山をば神路山と申
大日如来の御垂跡を思ひてよみ侍る
円位法師
深く入りて神路の奥をたづぬればまたうへもなき峯の松風

治承四年遷都の時伊勢大神宮をうつさるへきよし
聞えしかば会して侍りしによみ侍る
大中臣為定朝臣
月よみの神してらさば雲霧のかかる世とてもはれざらめやは
うきながら世の中なほとたのまるるかな
石清水社の歌合とて人々よみ侍る時社頭月と
いへる心をよめる
寂蓮法師
いはし水清き流れの絶えせねばやどる月さへくまなかりけり
長元九年後朱雀院の御時大嘗会主基方の神
あそびの哥丹波国神なび山をよめる
藤原義忠朝臣
神なびの山の榊はさしてぞいのる万世のため

治暦四年後三条院の御時大嘗会主基方神奈良の所
いとや山とよめる　藤原經衡
うこれなくなく千代とも行るいとや山とる柳をもつ色かへもして
寛治元年堀川院の御時大嘗會悠紀方神あ
そひの所諸神卿とよめる　前中納言包房
いかしへの神の御代ともいふ所なれ行かいとひは君が世のなり
久壽二年　院の御時大嘗會悠紀方の神奈良の所
近江國末綿國とよめる　六月の永範
神うくるせ御かりまゆふそ御日新うつるそ御へ御さりける
永徳元年　宮倉院御時大嘗會悠紀方の神あ

そひの所近江國守山とよめる
すへらき我やと前代の神も皆君を盛る山の名をこれ
壽永元年大嘗會主基方の所をみてをり
もる時神奈良の所丹波國神なひ山紙とよめる
權中納言兼光
ゆしきをふるにかりけ神なひの山の柳とかさしにをる
元暦元年今上御時大嘗會悠紀方所をりもる
神あそひの所近江國諸神卿とよめる
藤原季經朝臣
をかうれ人をもそかなかりし君をやる代にいのる御ことは
かれし大嘗會の主基方所をみてをつりける
神奈良の所丹波國千年山とよめる

藤原光範朝臣

ちはせ山神乃代させる神とのゝ人間さるハ君ゝ為めしとる

右此事蔵後頼朝卿ニ於ケ豊嶺山座中ニ立憲澄法印

書写之ものなり

本時天保六乙未年秋七月廿三日蒲勒寺写記

中村萬吾直道